二年保育年少児の絵画表現の実態と指導の反省

石川春代

でくのぼうのようにつったって、部屋に入って来ない子ども、母親に手をひかれて、やっとの思いで幼稚園に来る子ども、このような二年保育年少児の子どもたちが、ようやく幼稚園生活に慣れた頃描いているのをみると、一年保育児よりも伸びのびと描いていて、しかも空想の世界が語られているということは、二年保育年少児の特徴がはっきりとあらわれているのではないでしょうか。

このように最も自発活動が盛んで創造力の豊かな、この幼児期に、いつの間にか伸びていく芽を、私たちはつみとったりしてはいないでしょうか。子どもの絵の発達がどのようになされているのか。

また、「ひとりひとりを認めてほめてやる」ということは、今までたびたび言われてきているが、子どもの発展をどのように捉えて認めてやったらよいのか。

そして幼児が喜んで何でもかけるためには、どのような配慮をしたらよいか、を考えて、本年度の指導を進めることにした。

一、幼児の描画の表現形式はどんなに変っていったか

城戸、周郷、井手氏らの監修になった「幼児画の指導」の中の表現形式の分類の1、発達による型（第一表・第二表）2、人格による型 3、空間表現による型、を参考として、昨年度一年保育児と本年度二年保育年少児の絵について調べてみた。

考察

①発達による型（第一表・第二表）

この型については、一年保育児と二年保育年少児には、相当の差がみとめられる。これは、心理的発達と平行して、絵の発達も一歩一歩成長していくものであることを物語っていると思われる。また、この型の表現形式の移行している変化の際の重なり、すなわち幼児の絵の動揺期については二年保育年少児のほうが、発達の週期が長い期間を要しているようである。

②人格による型（表省略）

二年保育年少児についてみると、ほとんど一学期はこの型の表現はあらわれていない。これは二年保育年少児は、この時期には、象徴期から前図式期に移る過渡期で、

多くカタログのように並べられて表現されていることが情緒的な表現には結びつきにくいのではないかと思われる。しかしこの時期には、幼児のことばによって、説明が加えられて補われる場合が多く見受けられるので、特に注意深く子どもの話をきくことが大切である。

③空間表現による型（表省略）

これを一年保育児と比べると、表現の型として表われるのに時期的なずれはあるが、二年保育年少児も二学期になれば、いろいろな刺激によって、この型の表現も表れてくるようである。

このように、表現形式の型が変化するということは、幼児の心理ならびに行動の変化をうつしだすものとして考えられる。したがって子どもの表現形式を理解することは、子どもを理解することであり、その指導に役立つものと考えられる。

では次に実際例として側面的な指導について述べてみたいと思う。

第一表　発達による型（一年保育児）

1. なぐりがき △　2. 象徴期 ●　3. 前図式期 ○　4. 図式期 ◎

月	4	5		6			7	9			10		11		12	1		2		3	
日	4.22	5.7	5.13	6.6	6.17	6.25	7.15	9.9	9.10	9.16	10.14	10.23	11.9	11.7	12.1	12.8	1.14	1.30	2.4	2.8	3.7	3.10
描画生活経験	水前寺動物園へお出かけ	子どもの日に市中行進をする	成夾園にお出かけをする	朝顔の観察	果物や見学をする	花屋見学をする	虫取りをする	夏休みの思い出をかく	朝顔の観察をする	藤崎宮のおまつりをみる	運動会をする	動物園をみる	黒石原遠足をする	田んぼ見学をする	消防署見学をする	おもちや店見学をする	お正月遊びをする	植物園見学をする	豆まきをする	学芸会をする	幼稚園のお庭をみる	自由画帳　表紙つくり
幼児名																						
男児 1	◎	◎	◎	○	◎	○	○	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
2	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎		◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎
3	○		○		○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○			○		○	◎	◎	○
4	●	●	●	●	●	○	○	○	●	○	◎	○	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5	○		○		○	○	○	○	○	◎			◎					○	○	○	○	○
6	○	○	○	○		○	○	●	○		○		◎			○	◎	◎	◎	◎	◎	◎
7	○		○		◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	◎	○		○	○	◎	◎	
8			○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○
9	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
10	●	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○	○	
11		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○
12	●	●	●		●	○	●	●	○	●	●	○	○	○				○		●	○	
13			○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	
14		●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	○	●	○	○	●	○	●	○	●
15	●	●	●	○	●	●	○	●	●		●	●			○	○	○	○	○	○	○	○
女児 1	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	◎	◎	◎	○	◎
2	○	○	◎	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎
3	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	○	○	○	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	○
4	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○
5	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○	◎	◎	◎
6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		◎	◎	◎	○	◎	◎	○	○	◎	◎
7	○	○	○	●	●	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○
8	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

二、指導の実際例（側面的な指導）

(1) 虫取りの表現について

(イ) 蝶々のとんだところを線遊びとしてかいてみる。（第一図・第二図）

・なぐりがきの子どもが三名ほどみられたが、ほとんどの子どもは線遊びが出来た。描いているときも、非常に伸びのびと喜んで描いていた。

・これによって子どもは色をぬることよりも、かくことに興味をもち、新しい経験の喜びを味わったようである。

(ロ) 室内を虫になってとんだ後、かいてみる。（第三図第四図）

・幼児の絵は、幼児の生活経験を通して発展していくものであるから、ただ線遊びでなく、子どもの経験発表として表現させてみた。

・これによると、自分の経験発表をしている子どもは七名で、概念的な表現をする子どもに、一、二、表現の固定がみられた。

・このことは、線遊びを同じ方法で何回も

第二表　発達による型（二年保育年少児）

1. なぐりがきへ　2. 象徴期 ●　3. 前図式期 ○　4. 図式期 ◎

月	4	5			6			7			9					10			11					
日	4.19	5.14	5.15	6.17	6.24	6.25	7.2	7.8	7.17	9.2	9.9	9.12	9.16	9.17	10.13	10.22	10.30	11.6	11.10	11.11	11.12	11.13	11.15
描画生活経験	好きな絵をかく	熊本城へお出かけをする	朝顔のたねまきをする	お花や見学をする	果物や見学をする	〃	しやぼん玉遊びをする	七夕まつりのおかざりをする	線遊び（蝶々のとんだ後）をする	夏休みの経験発表をする	室内を虫になって飛んでみる	虫取りをする	お祭りをする	〃	運動会をする	動物園見学をする	百花園見学をする	田んぼの見学をする	絵本についてお話をする	駅見学をする	ごっこ遊びをする	レコードをきく	用具を使ってのりものごっこをする
幼児名																							
男児 1	●	●	●	●	●	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2		○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎	○
4					●	△	●	●	○		○	○	●	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○
5	△	●	●	○	○	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	
6	●	●	○	●	●	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○		◎	○	○		○
7	●			○	○	●	●	○	○	○	○		○	○	◎	○	○	○	○	○	●	○	○
8	○			○	○	○	○	○	●	○	○	○			○	○	○	○		○	○	○	○
9	●	○	●	●	●	●	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	△	●	●	●	●	●	○	○	●		●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11		●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○			○	○	○	●	○	○
12	○	●	●	●	◎	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●		○		●	
13	●	●	○	●	△	●	△	●		△	●		●	○	●	○	○		●	○	●	○	○
14	●			●	△	●	●	●			△	●	●	○	●	○	●		●	○	●	○	○
15	●	●		●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●		●	●	●	○	●	●	●	●
16											○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○
17		△	△		△	△	△	○	△	△	●	△	●	●	●	△	●	●	●		●	●	●
18	●	●	○	○	●	●	●	●	△		●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●
19		●		○	●	●	●			○	○	●	○	○	△			●	●	●	●	●	
女児 1		●		○		○	○	○	●			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	●	●	●	○	○	○	○	○	△	●		●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	●	●	●				●	●	●	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	●	●	●	△	△	△	●	●	●	△		●	△	△	△	●	●	○	○	○	●		○
5	●	●	△	●	●	●	●	●	△	○		○	○	○	●		○	●	○		●	○	●
6	●		○	○	●	○	○	●	○	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	●	○	
7	●	●		○	●	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8		●		○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○		◎	○	○	○
9					●	●	●	●	●	●	●	○	△	△	○	●	○	●	●	○	●	○	○

繰りかえし表現させるのでなくて、新しい経験を創り出していくよう問題の与え方に工夫が必要であることを示唆している。

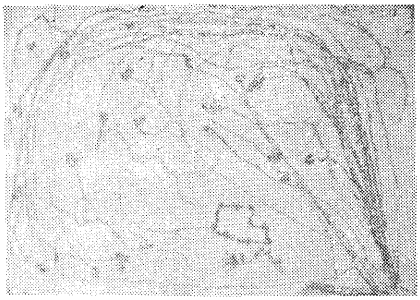
・床の上を走ったり、とんだりしたことで、平面と空間の認識がみられ(第四図)、また自分のとんだことだけでなく、机など自分をとりまく環境についても注意が向けられたことは(第三図)、子どもたちにとって大きな発見であったと思われる。

(ハ)(イ)(ロ)の指導は虫取りの絵にどのように表れたか。(第五図・第六図)

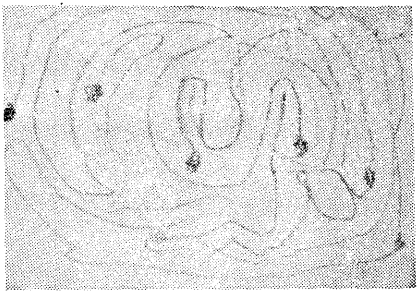
・昨年の研究結果、ただ話し合いだけで描かせないで、遊びを再現させてから描かせるほうが豊かな表現になったので、本年度二年保育年少児にも、そのような経験をさせて描かせてみた。

・その結果をみると、本年度は虫がどんなにとんだか、自分がどのように追っかけて虫をとったか(第六図)、また虫をとるために何本もの手がえがかれ(第五図)、描写の内容が豊かに、しかも生き生きしてきた。このことは線遊びが生活経験に結びついたあらわれであると思われる。

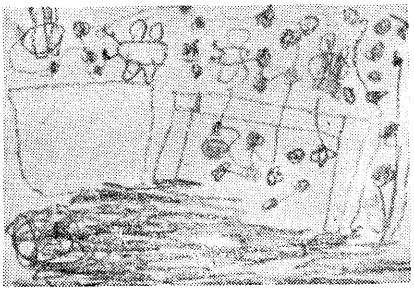
・したがって幼児の描画指導においては、幼児の生活経験や、身体的な活動を豊かにすると共に、線遊びのような指導を加えることは、子どもに表現の自由を体得させ、更に新しいものの表現獲得へと発展させることになると思う。



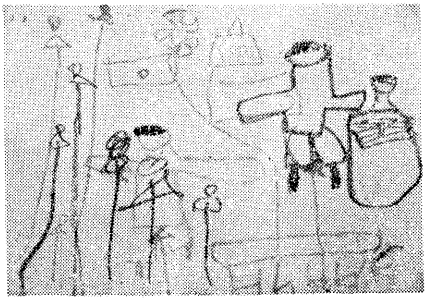
第一図



第二図

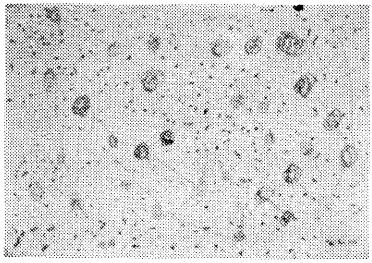


第三図

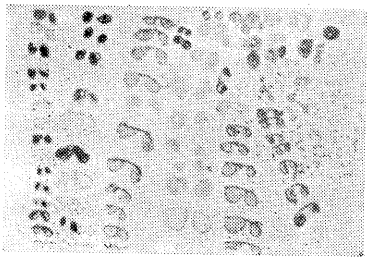


第四図

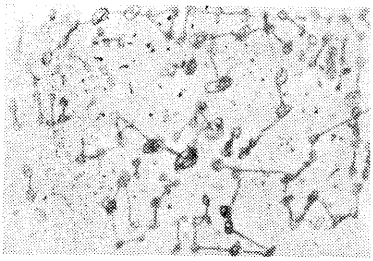
第七図



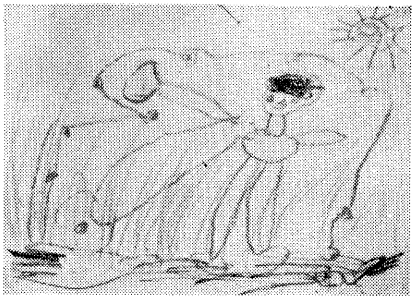
第八図



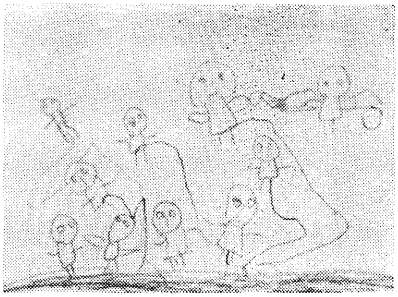
第九図



第五図



第六図



点と線の表現遊び

◎点と線の表現遊びをする。

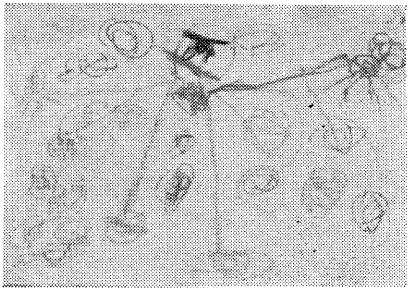
（第七図・第八図・第九図）

・自由に小さい点、大きい点をかくようにし、仲よしの点を結ぶことにした。これは二名ほど点が結ばらず、点だけのものもあったが、他の子どもはみんな結んでいた。

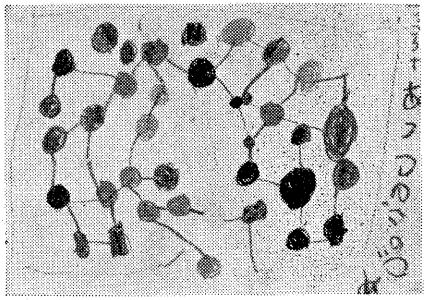
・なぐりがき期の子どもをみると、無意味な線が整理され、ものとものとの関係が意識されたことは良いことだと思った。

・また、点から「先生蝶々みたいになった」と具体的なものの表現に移行していた子どももいた（第八図）。模様遊びなども、このような遊びから発展できるのではないかと思った。

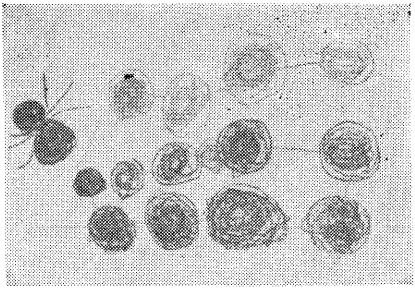
・子どもといっしょに鑑賞しながら「何に見えるでしょう。」と聞いたが、「野球をしているところ」（第九図）「くものすのようだ」（第七図）など適切なことばで表現しているのをみて、幼児の空想力のたくましさに感じさせられ、このような遊びも無意味ではないことを思った。



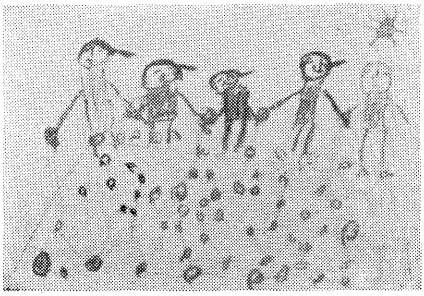
第十図



第十一図



第十二図



第十三図

◎おはじき遊びをする。

（第十図・第十一図・第十二図・第十三図）

・幼稚園の前から、小石を拾って「おはじき遊びをしよう」と始めた。これは先の点と線の遊びを子どもの生活経験を通して表現させようとしたのである。

・幼児はこの遊びについては、石拾いに興味をもち一生懸命に小石をさがしている。「二〇ぐらい拾ったらもういいですよ」といっても一向ふり向こうともしないで拾っている。いかに具体的なものに興味をもっているかを考えさせられた。

・この表現をみると、K児のような石のあたった音を表現するような聴覚的な表現や（第十二図）S児のように自分の手が何本も出ているような情緒的な表現（第十図）もみられた。

・この遊びを通して、幼児がいかに具体的なものに興味をもち、このような遊びも、幼児の画材になるということを知ったのである。

三、側面的指導の効果

・年少児においては、特に表現力が低いのでこのような側面的指導の効果（描くことに対する抵抗を少なくすること）が、一年保育児より更に顕著に現れている。けれども、単に点や線で表現する遊びを覚えることだけでは表現は発展しないように思われる。点や線遊びは、創作するための手段

であり、この手段が自由に使えれば表現しやすくなる。しかし描く時には、子どもは興味のあるものだけをかくので、動きのある遊びを与えて刺激してやることがより大切で、このような点や線の遊びをさまざまに発展させ、いろいろな経験を積ませていくことが創造力を一層健全なものに発達させていくものであると思う。

・なぐりがきの子どもには、なるべくかくことについての意味づけに導くよう試みたのであるが、Y児のように、なぐりがきから象徴期に移行しつつあるとき線遊びをすることは、より効果的な結果が得られたようである。

・概念的な絵をかく子どもについてみると点や線遊びなどにより、いろいろな表現の仕方があるということを体得することができたのではないかと思われた。そして、少しずつ自分の型を動きのある表現にすることができ、概念的な子どもの治療法の一つになることがわかった。

結び

このように指導を試みてみたが、幼児は、まだやっと喜んで絵をかくようになりかけたところである。

ある日、遊ぎ室で乗物ごっこをしたが、少しせまくてぶっつかって、こぶを出してしまった。その直後、こぶを出した子どものかいている絵をみると、大きな柱のわくが両方にえがかれ、中央のせまい所に二人の子どもが頭をくっつけているのであった。この子は遊びを通して、室のせまさを感じたのであろう。このような子どもの訴えや願いも受けとめて、幼児のひとりひとりの成長を見守りながら、より豊かに育っていくよう、今後も一層この道にはげんでいきたいと思う。

（能本幼稚園）

少さい経験

鈴木輝子

私の組の研究

朝、室いっぱいに流れてくる音楽に、二、三人の子どもが熱心に耳をかたむけ、リズムに合わせて、首を振ったり、手を叩いたりしていた。

次の朝また同じ曲をかけてやると、楽しそうに耳をかたむけていたのが、それであき足らなくなったのか踊り始めた。

このような様子を見ていると、子どもたちって本当に、音楽に対し順応しやすいだなあと、しみじみ感じさせられるのである。

時どき遊びや仕事に熱中しながら、子どもたちが、自分勝手に作った歌を口ずさむ